平成28年度第2回　仙台市放課後子ども総合プラン運営委員会
（議事録）

1　日　　時　　平成28年12月19日（月）　14時00分～17時00分

2　場　　所　　学校法人ろりぽっぷ学園内

3　出 席 者　　委員定数10名（出席委員8名，欠席委員2名）
（1）出席　　水谷修委員長、佐藤憲子副委員長、長内美香子委員、熊谷元和委員、田辺泰宏委員、梨本雄太郎委員、佐藤康行委員、千石浩委員
（2）欠席　　佐藤美佳子委員、堀越祥浩委員

4　議事録署名委員　　佐藤憲子副委員長，千石浩委員

5　議　　事　（1）高学年児童受入れに関するアンケート調査結果について
（2）高学年児童受入れに関する現地視察について
（3）高学年児童向けの活動プログラムのあり方等に係る意見交換について

議事要旨

1　開会

2　委員長挨拶

3　議事
（1）高学年児童受入れに関するアンケート調査結果について
資料1～3に基づき児童クラブ事業推進室長及び生涯学習係長が説明。

（質疑応答）
（梨本雄太郎委員）
資料3の「職員の役割」で「自主性や社会性を育むよう育成支援する役割を求めている」という回答が他都市で4/4、民間事業者で3/3ということだが、具体的にはどのような活動の中で大人が関わり支援をしているのか把握していれば伺いたい。

（児童クラブ事業推進室長）
高学年児童の保育の指針として、放課後児童クラブに安定して来所することができ、高学年としての自覚と責任を持つことができることや、生活習慣において自分の意志で生活をコントロールするこ

とができる等の目標を設定し、高学年としての立場を説明し、その役割を児童に与えるという視点を持ち取組を行っていると伺っている。

具体的には、遊びや読書の時間にリーダーとして低学年をまとめる役割を与える他、ゲームやスポーツを低学年に教える際に高学年をお手本とするよう指導していると伺っている。

（梨本雄太郎委員）

その辺りが具体的に見えてくるとよい。こういった考え方は非常に大事であると思うが、仙台市が色々な地域の中で取り組んでいくときに何が課題になるのかを考えなくてはならない。職員の人数や活動場所の問題といったハード部分が課題となるのか、そうではなく高学年の子どもにとって魅力のある活動や、人間関係なども含めたプログラムそのものが高学年のニーズに応えることが難しいということなのか。活動内容の問題がどうなのかということで話を伺ったが、伺った限りではこのような取組を仙台市の中で実施していく中で、こういった点で難しいから実現は無理だということはないということか。

（児童クラブ事業推進室長）

そういったことはない。

（水谷修委員長）

札幌市の場合、仙台市同様、高学年児童を段階的に受け入れ、平成25年度から6年生までを受け入れるようになった。受け入れ児童数は平成25年度が1900人、平成28年度になると3,000人を超えている。京都市を見ても、平成27年度は1,200人であったが、平成28年度は1,700人近くになっており、神戸市でいうと504人が1033人と倍の人数となっている。初年度は別として、どんどん増えていっているのが他都市の例であると思う。仙台市の場合、このような見方を必ずしもしていなかったのではないかという気がするが、この数字をどのように見ているのか。当初予定の推移表があった。他都市の例が仙台市にそのまま反映されるかはわからないがこの数字をどのように見ているのか。

（児童クラブ事業推進室長）

この数字については児童を取り巻く環境の変化が影響していると思う。一人親家庭の増加、核家族化の進展、女性の社会進出の増加ということもあり、当初想定していた学年の引き上げに伴う登録児童数の増加以上に登録率自体が上がっている状況であると思う。我々で平成27年3月に作成した「すこやか子育てプラン」があるが、こちらの登録児童数の推計についてもアンケート調査をもとに実施しており、一定の増加率を見込んでいる。しかし、現状において思った以上に登録率が多く、受け皿整備も当初想定した以上にやらなければならない状況である。我々と同じような状況が他都市でも起きているというのは伺える。

（水谷修委員長）

かなりの需要がある中でプログラム作りも検討していかなければならないということが分かった。

資料3、3ページ目上部の質問項目にある放課後子ども教室との連携状況について、他都市の例でいうと活動プログラムへの参加があるが、具体的にどういったことなのか。児童クラブと放課後子ども教室の距離や施設の問題等、どういうところが上手く応用出来ているのか。民間事業者の中で今後放課後子ども教室との連携を検討したいという団体もあるが、今行われていないということであれば、出来ない理由があるとよいのではないか。

（児童クラブ事業推進室長）

放課後子ども教室の中で実際に連携している都市は4都市中2都市である。広島市では放課後子ども教室自体を行っていない。2都市では連携したプログラムを行っているということである。具体的には、放課後子ども教室と児童クラブの実施場所が同じところや近くにある場合は、主な取組について聞いているが、全てがそのような形になっているかは伺っていない。実施していると回答した都市については全てが実施しているわけではなく、同じ小学校や近隣にある場合は、放課後子ども教室と児童クラブを実施している。

民間児童クラブで放課後子ども教室との連携を検討したいということであるが、ハードルになるものとしては、実施場所の距離があると思う。放課後子ども教室を行っている小学校のすぐそばで児童クラブを行っていると連携の仕方が出てくるかと思うが、距離があると難しい部分が出てくるのかと思う。

（生涯学習係長）

国がいう連携は放課後子ども教室のプログラムに児童クラブに登録している子どもが参加することであるが、放課後子ども教室にもキャパシティがあり、例えば、大人2人で見ているため、子ども30人で手一杯であり、これ以上、児童クラブの子どもたちが子ども教室に参加させてくれと申出があっても安全確保等の面で対応がしきれないという意見をいただく場面がある。室長が申した物理的な距離の問題に加えて、こういったキャパシティの問題もある。民間事業者の関連でいえば、情報といった点で、放課後子ども教室で行っているプログラムの内容が民間事業者にタイムリーに伝わりづらいという側面もあると思う。

（梨本雄太郎委員）

距離が離れすぎているため連携が難しいということであったが、離れたところにいく場合は子どもたちが一人一人自由にという訳ではなくスタッフの方が付き添って連れて行くという理解でよいか。

（児童クラブ事業推進室長）

それぞれの職員が共通のプログラムを作成し、放課後子ども教室の中に児童クラブのメンバーが行って一緒に話を聞くといったことを想定している。

（梨本雄太郎委員）

基本的には歩いて行ける範囲ということでよいか。離れていても車を使って移動をするといった工

夫をしていると回答しているわけはないのか。

（児童クラブ事業推進室長）
具体的な移動手段については伺っていない。

（2）高学年児童受入れに関する現地視察について
資料 4～5 に基づき児童クラブ事業推進室長が説明。
「学校法人ろりぽっぷ学園ろりぽっぷ学童」に基づき担当者が事業概要の説明。
現地視察及び質疑応答

（質疑応答）
（佐藤康行委員）
これからお子さんたちが帰ってくるということで、多い場合は 40～50 人在籍しているということであるが、どのような職員体制で臨んでいるのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
職員 4 名、バス送迎職員 2 名体制で行っている。バスの職員で急遽退職された方がいるため、今は保育園の主任と私でまわしている状況であるが、基本的にはこのような体制である。

（佐藤康行委員）
時間帯に応じてずらしたりはしているのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
出勤はシフト制でずらしている。朝から来る職員と、10 時や 11 時から出勤する遅番の職員がいる。18 時くらいまでは職員がいる状態にしておくが、18 時を過ぎると子どもの数が減るので 18 時以降は 2 名体制にする等、職員の数を調整しながら運営している。

（佐藤康行委員）
午前中の子どもがいない時間から職員は配置されるのか。準備等を行っているのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
準備をしてもらったり、幼稚園や保育園もあるので急遽対応が必要な時に動いてもらったりする。

（梨本雄太郎委員）
幼稚園と保育園の関係について、例えば 0、1、2 歳児が保育園で 3、4、5 歳児が幼稚園となるのか、それとも同じ 4 歳児はどちらにも属するのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
認可保育園であり、0歳児から6歳児まで1クラスずつある。幼稚園の方が3、4歳児で各学年2クラスずつある。3歳児以上になると保育園が1クラス、幼稚園が2クラスと計3クラスという形になる。
来年4月から0、1、2歳児のみを対象とした小規模保育園がログハウスの1階で行われ、学童の子との関わりをどうするのか試行錯誤しているところである。

（梨本雄太郎委員）
お子さんたちは一緒になることがあるということであるが、先生方の担当としては学童、幼稚園、保育園と完全に別になるのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
そうである。

（梨本雄太郎委員）
普段の活動について、ゾーン保育をされているということで、園外活動は季節ものであるためいつもということではないと思うが、それ以外のものは日常的に行っているのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
学校は振替休日が結構多い。授業参観等で月曜日が振替休日になることが多く、そういった日は極力園外に出かけるようにしている。

（梨本雄太郎委員）
出かける日以外の平日は、子どもたちが自由に活動してもよいのか。宿題を終わらせてから遊ぶ等のルールはあるのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
宿題をまず終わらせ、おやつを提供できる時間が限られているため、16時過ぎにはおやつを食べさせ、その後、外に出て犬の世話をしたり、球技で遊んだりとそれぞれの活動に移っていく。

（梨本雄太郎委員）
外で遊ぶか中で遊ぶかといったことは子どもたちの自由なのか、曜日による働きかけはあるのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
前日の子どもたちの遊びの様子等を見て、職員がある程度遊ぶ準備をする。例えば、先週の金曜日に今日はカフェをやるという話になっていたが、いざ子どもたちが帰ってきた時にそのようなスイッチが入っていない場合は急遽それはまるっきり無しにしてしまう。先生がやろうと思っていたから子どもたちを引き連れて行うということはない。学校の体育で行った遊びをやりたいと言われた場合、

その活動を急遽やるということもしている。

（梨本雄太郎委員）
季節や天気を見ながらその日その日で臨機応変に行うということか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
そうである。遊びが継続できるように今までやった内容のチラシを掲示したり、保護者に配布したりと遊びが単発で切れてしまわないように気を付けながら、前の遊びが次の遊びに生かされていくように工夫している。

（佐藤憲子副委員長）
外遊びといった際に、今の季節は日が暮れるのも早く16時を過ぎると暗くなるが、4名の職員の散らばり方はどのようになるのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
外に子どもたちが出る際は、必ず職員1人以上は付くようにしている。例えば、中でカフェを行う際、先生をそこに付ける予定だったが、遊びが中止になり外に子どもたちがいる状況であれば外に2人付ける等、子どもの数に応じて中に付く職員、外に付く職員を配置している。

（佐藤憲子副委員長）
子どもたちの雰囲気は日によって違うと思う。ちょっとしたことで雰囲気が変わることもあるが、そういった際の配慮はどのようにしているのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
男性の先生や女性の先生、中堅の先生やベテランの先生がおり、先生ごとに得意な分野がある。子どもに遊びは任せるが、先生と子どもが一緒に遊びを展開していくようにしている。先生が楽しそうであれば子どもが惹きつけられて遊びに加わることがあるため、惹きつけ方を工夫している。無理強いはしないが、経験させたいこと、やってもらいたいこと等に関しては意図的に惹きつけている。

（ろりぽっぷ学園長）
落ち込んで帰ってきた子どもがおり、子どもからの情報で何があったかを把握し、先生がその子どもに寄り添う等、子どもから得る情報が多い。子どもなりに学校で頑張ってきているため、1対1でついてあげることもある。そういった場合は他の先生方が周りの子どもを見るようになるが、保育園にも先生方がおり、トランシーバーを使って誰がどこにいるかといった情報をその都度共有できるため、保護者が迎えに来た際も皆で子どもを見ているため連携は取れている。

（ろりぽっぷ学園担当者）
幼稚園児や保育園児であれば、先生が親身になればなるほど嬉しいものだが、小学生になると知られたくない事実がある。特に高学年は踏み込んでほしくない部分もあるため微妙な駆け引きがある。先生によって接し方が変わることもあるため、先生同士で連携を取りながら対応している。特に高学年になると、大人として対等に接する時もあれば、指導する時もある。

（長内美香子委員）
19時45分まで預かり可能ということだが、その時間までいる子はいるのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
年度によって違う。今年度は毎日ではないが、19時45分まで利用する子どもは4名くらいである。18時15分以降は延長料金が掛かるため、大体その時間を目途にお迎えにいらっしゃる。それ以降は10名ほどが残っており、19時を過ぎて残っている子どもは2、3名、多くて4、5名である。それ以上残っていることはほぼない。

（長内美香子委員）
食事を済ませてから19時45分まで過ごすのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
18時15分に焼きおにぎり等の軽食が保育園の給食室から提供される。

（長内美香子委員）
18時15分以降の100円は、18時15分から100円ということか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
16分になった時点で100円掛かる。18時16分以降に迎えにきた方は軽食代も含まれている。

（長内美香子委員）
長時間に渡ってお預かりをしている子で、帰りたい、来たくないというお子さんはいるのか

（ろりぽっぷ学園担当者）
いない。例えば、その日の活動が盛り上がると、お母さんの仕事が早く終わって17時に迎えに来た場合は一度お母さんに帰ってもらい、18時15分まで遊び、もう一度迎えに来てもらうこともある。
ここで遊んでもらいたいため、放課後、公園で遊ぶよりもここにきて遊ぶ方が楽しいとなるように試行錯誤している。児童館よりも料金をいただいているため、それ以上のものをしないとお母さんたちからも納得していただけず、子どもたちにも申し訳ない。先生自身が面白いと思うものを子どもに提供している。

（佐藤憲子副委員長）
今日は児童クラブに行きたくないという子はいないか。

（ろりぽっぷ学園長）
今のところはいない。学校の延長線でそのまま友達と遊びに行ってしまうことはある。子どもが学校から来ない場合は学校に連絡し、学校から出ましたと言われれば、園の職員と先生方とで探しに行くことは4月、5月によくある。それ以降は、放課後は園に来るというルールを伝えると来てくれる。

（佐藤憲子副委員長）
六郷小学校の子どもたちはスクールバスで来るということだが、何時に出発するといった形をとっているのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
学校にも時刻表を渡し把握してもらっている。子どもたちには学校のグラウンド等で待たせていただき、バスが来たら乗るようにしている。特定のクラスだけ遅い場合は、バスでも出欠を取り、乗っていなければ子どもたちを園に連れてきた後もう一度回っている。学童に通っているから必ずこの時間に出していただくということはしていない。学校での生活もあると思うので、学校で行うことは他の子どもと同じようにやってもらっている。バスは基本的には出席予定の子が全員乗るまで運行するということを学校にもお知らせしている。

（佐藤憲子副委員長）
低学年と高学年では授業が終わる時間が異なるため、2回、3回と迎えに行くことになるのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
3回は行かないと全員を乗せることはできない。

（佐藤憲子副委員長）
学校行事や短縮授業、臨時休校などの際は学校から情報をもらうのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
学校から全て連絡をもらうと学校の負担になってしまうため、保護者と直接やり取りをするようにしている。

（佐藤憲子副委員長）
学校と情報のやり取りをすることはないのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
年度初めに挨拶に行き、学童を利用する児童とバスの時刻をお伝えする。バスに乗ってこない時に連絡を入れることはあるが、児童の様子等でこちらから学校に問い合わせるようなことはなく、その旨を保護者に伝え、保護者と学校とで連携を取ってもらうようにしている。

（熊谷元和委員）
言うことを聞かない、問題行動をとるといった子どももいると思うが、そういった際の職員のフラストレーションへの対応は厳しいと思うがどうか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
先生には我が子くらい可愛がってもよいが、我が子ではないため、怒る際も感情的になるのではなく、プロとしてお金を貰って預かっているということを意識させている。指導の中でイライラすることがあった際は冷静になり、お預かりしている子どもであることを考え、怒るにしても自分なりに筋を立てて怒るよう指導している。自分の子どもとかぶるところもあり、感情的になりがちな職員もいるが、そのような場合は周りの先生にもフォローしてもらいながら連携して指導している。様々な年齢の先生がいるため、午前中に意見交換を行う等振り返りを行っている。

（熊谷元和委員）
そのような際に対応するためのマニュアルや研修はあるのか。必要と考えるがどうか。

（ろりぽっぷ学園長）
児童館職員の研修に行っている。園の中の研修では、保育園も幼稚園も同じ子どもを預かっているため、無理な時は無理と言うよう先生に指導している。自分の子どもではない他の子どもたちの面倒を見ていく中で、ノイローゼになりそうと感じたり、フラストレーションが溜まると感じたりする時には他の先生に「代わって」と言うことができるような環境を作っている。このような部分については職員ミーティングでも伝えている。

（ろりぽっぷ学園担当者）
「保育士の手引き」として、保育士、幼稚園教諭がこうあるべきであるという内容を示したマニュアルを一人一部ずつ持っていただいており、それを使いながら新人の先生はもちろん、それ以外の先生にも毎年１回研修を受けていただいている。

（熊谷元和委員）
ログハウスにボードゲームやオセロ、将棋等があったが、テレビゲームのようなものの持ち込みはどうしているのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
持込禁止にしている。職員室に声を掛ければ、卒園児は園庭で遊べるようにしているが、おやつやジュース、テレビゲームは持ち込めないこととしている。

（千石浩委員）
学童保育において 1 年生から 6 年生まで参加者がいるということであるが、学年の違う子どもたちが上手くやっていくために、高学年が低学年の面倒を見る等の話があったが、職員で心掛けていることはあるか。それとも自然と上手くいっているのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
意図的に高学年児童に頼るようにしている。職員が高学年の児童を常に怒っていると、低学年はその児童をできないと思ってしまうため、職員も高学年をできるだけ立てるよう心掛けている。低学年の児童が先生に教わりにきた時にはそれを得意とする高学年の児童に教わるよう働きかける等、高学年の児童が先生になれるような機会を分野ごとに設け、得意なところで自信が持てるようにしている。行事も先生が全部やるのではなく、高学年が主体となって仕事ができるよう配慮している。

（千石浩委員）
子どもたちとの接し方についても研修等を行うのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
子どもの自主性を大切にしようということで、そのような研修を行っている。先生によって様々な関わり方があるため、絶対にこうしなければならないといったものは作っていない。先生の個性もあるので、まずは子どもたちと関わってもらい、おかしいと感じた場合は周りの職員や園長で指摘し、その都度反省しながら築き上げている。

（水谷修委員長）
そもそも 1 年生から 6 年生まで一つのプログラムで活動が成り立つものなのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
行う内容が違うため、6 年生が 1 年生に合わせることは多々ある。活動プログラム自体もこちらの学童では子どもが選択して行うため、得意な子どもたちがそこに行くことが多い。例えば、火おこしをする場合、やってみたい 1 年生が行くため、きちんとコミュニケーションを取りながら役割を分担し活動として成り立っている。勉強等の難しいものは困難かもしれないが、体験的な活動であれば年齢に関係なく楽しめる。

（水谷修委員長）
100 人くらいいるが、ニーズに合わせたプログラムを用意しておけば、ニーズに合う子どもたちが学

年に関わらず集まってきて活動が成り立つ。それがいくつかあれば上手くいくということか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
1年生と6年生のため遊びが成り立たないということはない。6年生は自分が1年生の時の経験があるため違和感なく下の子と関われる。さらに下の子がおり、1年生が一番下という訳でもない。真ん中が1年生で上が6年生、一番下は0、1歳となっており、活動プログラムの中で不具合はない。

（梨本雄太郎委員）
仙台市で行った調査の中に、1年生から3年生を対象に取組を進めているため、高学年には物足りなく感じたり、楽しめなかったりするという回答があった。やはり活動のメニューが高学年の楽しめるものであったり、逆であったりということがあるのではないかと感じる。

（ろりぽっぷ学園担当者）
低学年と高学年で一緒にいることが当たり前になると、兄弟で遊ぶ時に下の子が上の子に付いて行こうと頑張るような感覚となり、こちらの学童でもそのようなことが日常的に行われていると思う。

（熊谷元和委員）
途中で入ってくる子どもはいるのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
いる。そのような子は馴染むまでは大変であるが、気さくに周りの子どもが声掛けをしている。また、こちらの学童の児童が通う小学校が4～5校と多いため、途中で一人が入ってきた場合でもそこまで大変ではない。

（熊谷元和委員）
仲間外れということはないのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
ない。周りの子どもや先生が声掛けをしている。

（佐藤康行委員）
ろりぽっぷの幼稚園、保育園から上がってくる子はどの程度か。

（ろりぽっぷ学園担当者）
近隣に他の保育所もあるのでそこから上がってくる子も多い。こちらの卒園児と外部からくる子の割合は同程度である。幼稚園は入園金を入園の際にいただいているので改めて学童利用の際はいただいていないが、保育園は入園金をいただかないので学童利用の際は外部のお子さんと同様に入会金を

払っていただく必要がある。

（佐藤康行委員）
噂を聞きつけて入ってくるのか、それとも他の児童クラブがいっぱいだから入ってくるのか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
遅い時間まで預かっているため時間帯で選ぶ方もいる。また、キャンプや自然遊び、園庭での火起しといった活動内容に関心を持ち、習い事感覚で預ける方もいる。卒園児も幼稚園、保育園での活動を継続してもらいたいということで入れる方もいる。

（水谷修委員長）
特別な支援が必要な児童はこちらにもいるか。

（ろりぽっぷ学園担当者）
今はいない。特別支援学級の子が 6 年生まで通っていたが、保育園の卒園児であったため、先生が得意不得意を把握しており、上手いこと過ごすことができた。特別支援学級に通っていなくても気になる児童はいる。1 年生でも学習面で既についていけないお子さんが 3 名くらいおり、先生が個別に付いて指導をしている。個別に関わるお子さんも増えてきている状況である。

（3）高学年児童向けの活動プログラムのあり方等に係る意見交換について
資料 6 に基づき児童クラブ事業推進室長が説明。

（意見交換）
（佐藤康行委員）
先ほど見させていただいた中で、立派なところでお子さんも過ごしていたという印象を受けた。先ほどのお話の内容で、特にプログラムは分けないで行うということであったが、民間の児童クラブでは、幼稚園、保育園から上がってきた方が主となっており、企画に魅力を感じてくる方々であるため、ある程度落ち着いた方がいるという前提で成り立つのではと思う。そのためよいとは思うが、秩序を保つのが難しい一般の児童クラブでそのまま当てはめるのは難しいかと思う。一方で、高学年をグループのリーダー的な存在とし、役割を与えて企画行事を行っていくという点では公設の児童クラブでも参考になるのかと思う。
また、高学年になると活動範囲も広がるため、こちらの広い園庭のような広々とした活動場所が必要であると感じた。限られた遊戯室だと、時間帯を分けても混みいっているところがある。施設を改善することは出来ないながらも、やり方を工夫しなければならないといったところが感想である。

（熊谷元和委員）
本日見せていただいたろりぽっぷに関しては、0 歳から 6 年生まで受け入れる施設の一つの成功例で

あると思う。全ての地域で同じプログラム、内容でやろうと思うと当てはまらない部分や無理な点も多くあると思う。今回仙台市の放課後子ども総合プランとして検討を行う場合は、どのような地域でも当てはめられる内容やプログラムを作っていかないと、根付いていかない部分や受け入れられない部分が生じてしまうと思う。吸収するところは吸収し、やってきたことを真似することは大いに結構であるが、その辺りを踏まえたプログラムが出来ないと難しいと考える。

職員体制の部分では、おおよそ常勤 4 名、非常勤 2 名という配置の仕方をしているとのことであった。例えば、子ども何人に対して何人の職員が必要なのか等、場合によっては多くの職員が必要となることもあり、常にそのようにできるのかどうか。最初は最低限の人数でやっていくということはあったにしても、地域の規模にもよるが児童の数が増えていくとなるとどうなるのか。考えるところはいっぱいあると逆に感じた。

（水谷修委員長）

児童クラブは一律でものを考えなければならないのか。これは無理だとなるのはよく分かるが、ある程度決まりきった枠があり、その中でこれは無理だとか出来るといった話になる。その部分は指定管理であるので、その枠を外せるとか今までの枠を取っ払ってこんなタイプもあるといったように、色々なものが拾えるような提案ができると面白いのかと思う。児童クラブは人が詰まっているし、職員も足りないため、こんなものだというよりは、もう少し面白いものというか、パターンをいくつか考えてプログラムを出していけるとよいのではないかと思う。

（梨本雄太郎委員）

スタッフの人数は厚労省のガイドラインで決まっている。それと比べてぎりぎりの人数ではどうなのか、余裕があるとどうなのかということであると思う。活動内容については仰るとおり、どこでも共通にやれる部分もあるが、そうではないこともできるということで様々な例を集め、選択肢を市から提示することで、各地域で取り組むことができればよいと思う。今までは 3 年生までの受け入れであったため、このような活動内容、関わり方でよかったが、新しい学年が入って来ると今までと同じで良い訳がないので、思春期に配慮しなければならず、関わり方も違ってくるし、高学年になると体力も興味関心の幅も異なることから活動内容も違ってくる。そのようなことに応じた様々なメニューを集めて提案することが必要であると感じた。

（長内美香子委員）

来たくないと言う子どもがいない状況は理想であると思って聞いていた。児童クラブの子どもたちが行きたがらない状況を目にする機会が多く、理由としては面白くないからということであった。そのため、学年を上げても受け皿として機能するのかということは感じていた。ここの施設の魅力は他にはない活動であり、それらを求めて児童が来るといった点が成功例である思う。児童クラブという枠があるのであればその中で特徴を出し、何かＰＲができるようなものがあれば子どもが集まるのではないかと感じた。

（佐藤憲子副委員長）

児童館でもそれぞれの館で特色がある。ベースとなるものは仙台市で定めているが、例えばひとまちの児童館では横ならびに同じではなく、ひとまちのカラーの中でもそれぞれに色がある。色というのは活動の中身や方針であり、それが特色になるのではないかと思う。

（水谷修委員長）

特色が生きるような取組、学年が上がってもできるような仕組み等、アイディアを出していく。一律の基準であると子どもは来なくなるということに行きつくと思う。特色が上手く活かせて、そこに魅力が感じられるアイディアを出していくことが必要であると感じた。

（佐藤憲子副委員長）

やらなければならない最低のベースが定められており、それをやっていくとどこの児童館も似たような内容やイベントを行うようになってしまっており、特にひとまちの児童館で目にすることが多い。別の児童館はそれぞれの特色があるため、そういった部分をひとまちは見習っていくべきであると考える。こちらは広い園庭等の遊ぶスペースがあるが、今考えなくてはならないのは広さ等でなく中身である。日常普通に遊ぶ形で難しく考えず、ろりぽっぷの様に当たり前に5、6年生の中に4年生が来たら同じ遊びでも一緒に遊んでいけるような職員の声掛けや姿勢があるべきではないか。大人が低学年はこう、高学年はこうというような思い込みをしているのかもしれないと思う。

（梨本雄太郎委員）

子どもたちが毎日何十人もやってくるので、とにかく子どもたちに来てもらい、怪我や事故が起こらないように最低限のことをきっちりやることが基盤になっていると思う。しかし、単にそれだけではなく、子どもたちが楽しくて、毎日来たくなる、それが子どもたちの成長に繋がる、様々なことに興味関心を持って人間的な成長に繋がるというようなことをするためにどのような活動内容が考えられるのか。全部の地域、館で同じことをやるのではなく、それぞれで工夫をしてもらうことが必要である。例えば全館で馬を飼ったり、火おこしをしたりすることは難しいかもしれないが、できないのであれば変わるようなことをそれぞれが考えられればよいと思う。

アイディアとして色々なことがあり得るということを示しつつ、スタッフの方が余裕を持ち、新しいことにチャレンジするようなことができるかということが大事だと思う。先程お話を伺った際、職員のフラストレーションが溜まった時は、その場所を離れて別の方に交代していただくとのことであった。保育園、幼稚園、学童で仕事を分けていても、バックアップができる体制があるというのは強みであると思う。児童館のスタッフもガイドラインを満たしているということで満足するのではなく、スタッフがよりよい活動に取り組めるだけの余裕がないと、いくらメニューを示しても「無理です」で終わってしまうと思う。その辺りを市からやっていただけるとよい。

（佐藤康行委員）

札幌市では低学年児童をサポートするような取組みとして何をやっているかというと、高学年児童

たちで運営委員会というものを作って、子どもたちが地域と連携してイベントを企画したり、ゲームやスポーツを低学年に教える時に高学年が見本を見せたりといったことを考えてやっているということである。敢えてプログラムを強制するのではなく、そのような場を与えて募り集まった人が子どもたちとプログラムを組むというのもよいと思う。その点で札幌市の例が参考になるかと思う。

（水谷修委員長）
参画型でやっているという特色を出すのもよい。

（熊谷元和委員）
プログラムを作ってみてではあるが、やってみないと分からないという部分もあると思う。

（長内美香子委員）
3年生に多かったことだが、児童館に行ってもお世話をしろとしか言われない、また、自分が宿題や工作をしている際に低学年が邪魔をしてきても、小さいので仕方ないと我慢させられるといった話を聞く。先程も出たように認められる空間は必要である。自分がして貰ったことができるようになる、してあげるというお世話もいいことではあるが、そればかりでは子どもも向かないようである。

（佐藤憲子副委員長）
子どもたちも預けられている自分ではなく、自分がそこにいて時間を作るような取組はよいと思う。放課後子ども教室に来ているお子さんで、児童クラブにも行っているお子さんがいるが、やはり行きたくないと言う。人数が多いために決められていることが多い。放課後子ども教室は自分の気に合えば参加する、合わなければ友達と遊ぶ等自由である。
そのようなことを解消するために、子どもたちのやりたいことを一緒にやるという形で大人が支援して、時間を過ごしていければ、子どもたちも張り切ると思う。自分を認めてもらえる嬉しい場所になれば、子どもたちの育成にもなり、職員も手伝って貰えるためよいと思う。

（水谷修委員長）
それを仕組みとしてできるのか。どうやったら出来るのかを考える。最初の発想では、人数が増えて施設が限られるため、ある空間に4、5、6年生をどのようにして収めるかということであった。それを一旦やめて、どのようにすれば子どもが楽しみながら来るようになるのかといった方向に発想の転換をし、その次にたくさんの児童をどうやってはめ込むかという順番で考えた方がよいのではないか。最初の考えはどのようにすれば子どもが枠の中にはまるかというものであったため、それを変えた発想でこの委員会でものを言えたらいいのではないかと思う。そのようにしないとこの委員会の意味が無いような気がする。

（梨本雄太郎委員）
そのようなことを考える中で、保護者の方の意識が大事である。保護者の方がどのような意識で児

童館のスタッフと関わるかが非常に大きい。お金を払っているから責任持ってやれと丸投げなのか、そうではなくて、一緒に関わる機会があるのか。そこが館によっても違いがあるため、上手くいっているところではどのようにしているのか。スタッフと保護者が一緒になって何かを作っているよい例があるとよいと思う。

（千石浩委員）
今、児童クラブと地域との関わりはどの程度あるものなのか。

（児童クラブ事業推進室長）
館によって異なる。地域が盛り上がっているところについては、児童館に来て事業を一緒に行ったり、児童館も地域のお祭りに参加したりしている。一方で中々そのような取組まで至っていないところもあるのが現状で、濃淡はあると思う。

（佐藤憲子副委員長）
児童クラブの取組というよりは児童館の取組か。

（児童クラブ事業推進室長）
児童館の取組ではあるが、実際に行くのは児童クラブに登録している子が行って踊りを踊ったりという形になっている。

（佐藤憲子副委員長）
児童館を利用している子どものほとんどが児童クラブの子となっている。自由来館児童や中高生も来る、日中は小さいお子さんやお母さんも来るが、おおよそ児童クラブが児童館の活動の中心となって年間の行事が組み立てられているという現実はある。

（児童クラブ事業推進室長）
比重は大きいと思う。

（佐藤康行委員）
自由来館の子が自由に過ごせる場所がない。児童クラブの子でいっぱいのため、自分の子どもも行かない。場所がなく児童クラブのお世話を職員の方が基本的にやっているため、中々行きたいとはならない。

（梨本雄太郎委員）
中高生も一応想定対象になっているが、相手にされないというか、居場所がない状況である。

（佐藤康行委員）
中高生向けに遊戯室を17時以降に時間貸ししているため、そこだけに行くということはある。干渉されないので自分たちでそこが使える。

（水谷修委員長）
市民センターとの関わりはないのか。

（千石浩委員）
一時期検討したことはあったが、その後はあまりつながっていない。

（水谷修委員長）
それはなぜか。市民センターで子ども参画と言っていたこともあったが。

（梨本雄太郎委員）
児童館と併設されているところもあるが。

（千石浩委員）
児童館と併設されているところはある。そこについては児童も来る。そういうところでは市民センターの事業と連携してできる部分はあると思う。

（水谷修委員長）
地区館レベルでそういったことができないものなのか。

（佐藤憲子副委員長）
現実に事業としてはない。ジュニアリーダーを養成してもらい来てもらう、近隣の小中学校のクラブ活動でイベントがあるときに地域の人に混ざって何かをするということはあるが、スペース等のこともあり日常的にはない。先程話に上がった工夫というところをやっていかないと、スペースの話等にいってしまい何の解決にもならないと思う。

（千石浩委員）
先ほど地域とお聞きしたのは、体験活動や体験学習だと各学年それぞれの役割を持って楽しく参加できるということお聞きしたためである。体験活動をやろうとした際、児童クラブでやれるのかという話もあるが、放課後子ども教室では地域の方の協力で体験活動を行っている。児童クラブでもそのような余地があるのか、なければ放課後子ども教室と連携した一体型の運営につながることになるのかと思う。市民センターで体験活動を行うということもつながりとして可能性はあるのかと思った。

（佐藤康行委員）
地域のイベントに児童館として参加しても、実際に参加するのは児童クラブの子どもが参加している。また、地域の方と昔遊びをやったりはしているようである。しかし、それは特定の館であって全体的にではない。

（佐藤憲子副委員長）
福祉協議会の方等、地域の方に来ていただき、お茶を一緒にやったり、お花を教えて貰ったり、そのような体験型の事業を行っている児童館もある。それはイベントとしてあるのであって日常は場所が狭くて遊べない。自分の思うように放課後を過ごすことができないお子さんもいるし、精神的に不安定な子どもがいると職員がつきっきりになり、他の子に手がまわらないということもあるとのこと。そのような場合に、子ども同士のつながりの中で解決出来るようになっていけば、狭くても誰かと会えるといった人とのつながりも出てくるのではないかと思う。そうすれば、道具を揃える等をしなくてもよいのかと思う。

（水谷修委員長）
何か話ができるだけでなく、活動が作れるとか、一緒にやっていく中でつながりができたり、話ができたりする。その次の活動として何か考えておく必要がある。子どもたちの思いの中で自分たちのやりたいことができていき、そこで来ている子どもたちのつながりとか関係ができてくる。そのような機会を児童館の中に作っていき、それを保障していくことが制度としてできないかと思う。

（佐藤康行委員）
先程の話では要支援のお子さんは 1 名来ていたとのことであった。現場には色々な方がおり、少ない人数で対応している。要支援児も大きくなってくると体力もついてきて、より目配りが大変になる。職員が 4 名いるにしても、要支援児が出てきた時にどのような目配り気配りをしているのかが気になった。限られた人数の中で職員がどういった動きや目配りをし、どのようなルールを作ることで事故を減らせるのか。

（水谷修委員長）
マニュアルではないが、事例集のようなものはあるか。

（児童クラブ事業推進室長）
要支援児への対応については、「支援を要する児童への対応」ということでこの委員会で提言いただいており、各児童館にはそれをもとに色々な取組をしてくださいということでお渡しをしている。それをもとに取り組んでいただいているところである。

（佐藤康行委員）
放課後デイサービスと児童クラブを掛持ちしている児童が来ている児童館もあるため、そういった

ところと連携を図りながら負担を軽減していくというのを広めていくのも一つかと思う。

（児童クラブ事業推進室長）
要支援児が増えれば増えるほど、人の手が必要になってくるので、我々としても職員の加配をしている。ある程度のバンドを設け加配をし、今年その改善をしたところである。

（佐藤憲子副委員長）
研修という形では行ってはいないのか。

（児童クラブ事業推進室長）
主催であったり、ひとまちとの共催であったりするが、支援を要する児童への対応ということで、ひとまちが管轄する児童館だけではなく、全ての児童館の職員を対象とした研修会を行っている。

（水谷修委員長）
今年から支援を要する児童の 4 年生の受入れも始まったが、その場合に予め研修のようなものはあったのか。そのようなことは特別必要ではなく、今までの研修の枠の中で十分対応できるということであるのか。

（児童クラブ事業推進室長）
高学年の要支援児向けの研修は行っておらず、一律支援を要する児童への対応という形でしか行っていない。

（水谷修委員長）
要支援という枠組みの中でおさえきれるという判断なのか。高学年と 3 年生までとでは違うのか。

（児童クラブ事業推進室長）
体力の面でも違ってくると思うので、その面でいうと今回は高学年児童向けにはなっているが、一方で高学年になると児童クラブの登録率は下がってくる。下がってはくるが、支援を要する児童についてはやはりニーズが一定程度あるので、割合としては上がってくる状況になる。そうした際に今回の中にも支援を要する児童についての何らかの記載は必要になると思っている。

（水谷修委員長）
今後について、提案書をこの委員会で作ることになるので、今日いただいた意見を踏まえて、副委員長、事務局、私で必要な調整をする。その前に委員の皆様から意見をいただけるようであれば文書等でいただき、それを踏まえてまずは提案書の素案を副委員長、事務局、私で作成し、次回の委員会でお示しをする。あるいは、次回の委員会の前に一旦作成したものを委員の皆様にお示しをして、さらに意見をいただいたうえで当日の委員会で素案を提示する。このような進め方をさせていただきた

いがよろしいか。

（各委員）
異議なし

4　その他
（1）仙台市放課後子ども総合プラン運営委員会の提案に関する意見票について
資料７に基づき児童クラブ事業推進室長が説明。
（2）次回の日程等について
次回の日程、場所等については改めて調整して決定。

5　閉会

会議録署名委員　千石　浩

会議録署名委員　佐藤　憲子